

『若手大工育成プロジェクト』の経過など

故・田中文男氏について

故・田中文男氏は、1932年千葉県生まれ、1946年大工棟梁に弟子入りして腕を磨き、その後2010年8月9日の病没まで、(株)眞木建設・(有)眞木の社長として数々の業績を残される一方、多くの大工後継者も育てられた。

社寺や住宅などのあらゆる建築の設計・施工のほか、数多くの民家調査や文化財建造物の修理と復元などにも中心的に関わられ、幅広い知識と理論重視で「学者棟梁」と呼ばれ、文化財修理報告書などを中心に多数の論文があります。

また「技術と学問のコーディネーター」とも称されて、分野を超えたネットワークの広がり大きく、昨年10月に行われた「田中文男さんを偲ぶ会」には各界からそして全国各地から500名近い多くの方々が集まりました。

そして、氏は平成8年開校の職藝学院設立発起人の一人でもあり、学院における初代オーバーマイスターとして大工や庭師の卵たちを厳しく指導いただきました。

「新眞木塾」について

「田中文男さんを偲ぶ会」に参集された多くの方々の中から、氏のロマンを繋いで若手大工育成を支援しようという熱気溢れる声上がり、東京大学名誉教授 渡邊定夫氏を代表とする偲ぶ会の世話人と会の事務局が『若手大工育成プロジェクト』を提案し、その趣旨に賛同された様々な分野の多くの皆さんにより「新眞木塾」が発足しました。そして、「新眞木塾」を中心にしてプロジェクト支援の呼びかけと支援募金のための5回の講演会が開催されました。

「新眞木塾」という名称は、田中文男氏が生前若手大工の指導・教育などのために主宰されていた「眞木塾」からとっています。尚、「新眞木塾」の代表は、アラスカ大学フェアバンクス校特別顧問 系永正之氏、工学院大学建築学部教授 後藤治氏、雷電株式会社代表取締役 道場守氏の3氏です。

これまでの『若手大工育成プロジェクト』講演会

プロジェクト記念講演会 5月19日(木)

大武健一郎 氏 (元国税庁長官、東日本大震災復興構想会議専門委員など)

「日本の危機 東日本大震災をのりこえて」

会場：東京大学農学部「S 倶楽部」

第1回支援講演会 6月24日(金)

三井所清典 氏 (芝浦工業大学名誉教授)

「地域の復元力となる木造の住まいと建築」

会場：東京大学農学部「向ヶ丘ファカルティハウス」

第2回支援講演会 7月15日(金)

齊藤 英俊 氏 (京都女子大学教授)

「桂離宮に見られる構法・技法」

会場：東京大学農学部「向ヶ丘ファカルティハウス」

第3回支援講演会 7月22日(金)

宮澤 智士 氏 (長岡造形大学名誉教授)

「古民家の魅力を探る - 土肥家住宅の編年研究」

会場：東京大学農学部「向ヶ丘ファカルティハウス」

第4回支援講演会 8月9日(火)

橘 慶一郎 氏 (衆議院議員・前富山県高岡市長)

「災害を乗り越えて - 高岡の文化財の形成史」

会場 明治大学駿河台校舎「アカデミーコモン」

「眞木塾」について -眞木塾講義録より-

眞木塾講義録「数式のない構造力学」あとがきより (平成10年発行、発行・編集 眞木塾)

眞木塾の成果と心残り

眞木塾 塾長 田中文男

周知のように大工の修業は、基礎的な技能を馴れて身に付け、仕事のカン所を親方から教わって覚え区切りとなる。その後は、自分で習って技術を高めるのが通例で「職人は一生勉強」の所以である。

大工を志す他人の子を預かると、教えて覚えさせる義務が生じる。そのために仕事のカンは大生の経験を元に話せるが、これからの大工が必要とする構造安全性の講義は増田一眞氏にお願いして、眞木塾は発足した。受講者は脱落者を含めて平均十五名で、二十四回を無事終了した。

その後受講の有志一同は、増田氏の講義録を復習し検討を加え、内容を三分の一に抄録して本書を刊行した。この成果を多忙な身で講師を務めてくれた増田氏への報恩の証として献呈できたことを改めて関係有志の皆様へ感謝したい。

古来「大工は馬鹿でなれず、利口でなれず、中途半端でなおできず」といわれている。小生の預かる子弟が半端にならぬようにと始めた眞木塾だが、中には一言の挨拶もなく脱落した者が出て、当初小生の立てた志に反する結果となった。

その原因が、小生の不徳と非才にあることは、重々自覚し恥じ入っている。

しかし、周囲に時代潮流の予測はおろか自己の進退の予告もできず、自分で習って己を高める志のない人達が多いのは悲しむべき現実である。本書の刊行は喜ばしいが、今後社会に不要な、半端で与太な大工が増えるのが心残りといえる。